

烏森トレッキング回想記

第十一回

日時：'03. 11. 23 (日) ~ 11. 24 (月)

概略行程：

1日目 武蔵五日市駅～秋川橋河川公園／飯盒炊さん～本宿役場前～^{ほつさわ}松沢の滝～下平～
宿泊／民宿 かんづくり荘

2日目 ^{かずま}数馬温泉センター前～都民の森～^{みとう}三頭大滝～十里木ランド／バーベキュー～武蔵五日市駅

メンバー；齋木、米本、山田、吉川、大谷、小林、磯崎

東京都唯一の村、「檜原村」は、三方を尾根に囲まれた「柚子の里」。

奥多摩南西域に位置し、北には御前山山塊と大岳山稜／馬頭刈尾根が迫り、西には、山頂で山梨県との都県境界線を引く三頭山。

そして、南には、三頭山から張り出す「笹尾根」が伸び、尾根向こうの山梨県／上野原町との壁を造る。

更に、三頭山から伸びる別の山稜、「浅間尾根」が村の中央部を東西に走り、見事に村域を南北に分断、山塊なぞると、「E文字模様」を象形する。

今回は初めての、奥多摩／南西域トレッキング。

「浅間尾根」の東端から、檜原街道を南秋川沿い（「浅間尾根」南手）に上り、かつて養蚕地として栄えた「数馬の里」を、晩秋に訪ねる。

待ち合わせ地は、奥多摩登山の、もう一方の玄関口、武蔵五日市線の終着駅／武蔵五日市駅。

連休中日の駅前バス・ターミナルは、装い凝らしたハイカーで溢れ、例によって、次々と臨時バスが仕立てられるが、客を捌くに追いつかず。

西東京バスの案内人が、拡声マイクでバスの行き先をが鳴り立てるが、彼の周りには、終わるを待ってバスの行き先訊ねんと、ハイカー達が纏わり付く。

【余談25】奥多摩トレッキングの玄関駅は、既・の通り、青梅線の終着駅／奥多摩駅と、武蔵五日市線／武蔵五日駅である。

他のJR駅やバス停で降車する人の向かい先は、おおよそ推測できるが、上記2駅ではまったく見当がつかない。

ターミナルは武蔵五日市駅の方が整備されているが、混み具合、・頻度は、圧倒的に奥

多摩駅が勝るものと思われる。

今回は連休を利用し、初めて（日）、（月）のスケジュールとするが、定刻迄には、全員、無事集合。

森氏は所用により欠席。ただ、大谷氏が久しぶりに加わり、過去最高7名参加の大編成。

天気予報は、初日／終日晴れ、2日目／晴れ夕刻曇りと喜ばしてくれるものの、**見上げる空には雲厚く、つい森氏欠席の不安が頭をよぎる。**

早速、パーティを2分し、昼食担当の小林氏、それに山田、大谷両氏の計3名が、駅前、「パーク・ショッピングセンター」へ食材の買い出しに、残り4名は竈造りに、「秋川橋河川公園」へと別動する。

向かう道中、抜ける風は冷気を含み、周囲に見る樹々は葉落が進み、なお残る葉にも色褪せが否めず。

橋上から見下ろす「秋川」は、意外なるか、水量乏しく川幅狭小を知り、時期を逸っしたか、利便さの代償かと煩惱しながら、河川敷に降りる。

キャンプ場は、「秋川」の広い河原を利用したもので、案内パンフに見られるような、芋を洗うが如き繁忙期の様相は既に無く、静かで透明色の晩秋風景に包まれる。

また、間近で見る「秋川」の流れは、瀬音高く、水も清冽を知り、ひとまず安堵する。

鍋釜借用に、受け付けに並ぶや、場・管理人と女性リーダーの睨み合い。

石を積んでの直下炊き禁止等、利用規則を丁寧に説明する役人気質100%の親父が言うには、“これを説明するのが私の仕事でねえ、何かあった日にゃ、あたしが責任取らされれちゃうんだよ”

V S 実利に敏で、痺れを切らす熟女が返す、

“杓子定規にやってりゃ陽が暮れる、あたしや遊びに来たんで、お前さんの講釈何ぞ聞きに来たんじゃないよ”

と互いの言い分ぶつけ合う。

“それぞれのご意見ごもつとも”、と感心し、“互いに引くな!”、と我を忘れて、軍配替わりに団扇を扇ぐ。

やっと全容を表わした昼のメニューは、和風仕立ての「野菜の炊き合わせ風寄せ鍋」と「鶏肉団子鍋」の鍋料理2品と、市販の「おにぎり」、「細巻き」付き。

味、量、共に合格点も、強いて軍配を上げるなら、量が少な目で、若干、手が込んだ風に見えた後者に、皆の箸が集まったかも。

食後に一服。

初冬に吹く風が、河原に立ち昇る幾筋かの白い湯気を揺らしたり、時折射し込む晩秋の陽が、溪流向こう岸の樹々に残る彩色を、一瞬、浮かび上らせたりと、ぼやし画のような色模様を、しばし楽しむ。

いつも通りの長居で、予定のバスをまたもや見送り。

バス停からの距離とスケジュールの維持から、タクシー移動を一瞬考えるが、事前にバスカード(5,000X3=15,000→17,550 利用可)を購入済みであったため、次バス乗車を選択し、武蔵五日市駅に戻る。

次に向かうは、“日本の滝百選”にも選ばれた「払沢の滝」。

「^{せんげん}浅間尾根」の東終端に位置し、バス停からのアプローチに恵まれることから、時期を問わず訪れる人の多い景勝地で、1～2月の寒冷期には流れが氷凍結することでも有名。

最寄りのバス停は、「払沢の滝入り口」であるが、バス路線と便の関係から、2つ手前のバス停、「^{もとじゆく}本宿 役場前」で下車。

尾根の途切れから、南北の秋川が合流し、川名を「秋川」と変えるこの辺り、南北の村人が出会う、村の中心地でもある。

バス停そばの橋上から、「南秋川」の川面を覆う見事な紅葉を見つけ、自然の微妙さに感じ入る。

【余談26】 檜原村は、浅間尾根の北側が、「北谷」、南側が、「南谷」と呼称されている。

かつては北谷の方が人家も多かったようだが、檜原街道の開通により、南谷の軒数が逆転し、そのためか、その後長らくは、村民数で勝る南谷出身者が村長職を独占し、ここしばらくは、無投票当選が続いていた由。

ところが前回の改選時、北谷から対抗馬が登場し、久しぶりの村長選挙となったが、「浅間尾根」の壁は厚く、変わらぬ人口比に・と散ったとTVがドキュメント。

橋を渡り、南北の分岐点となる三叉路を右手、北の方角に取り、滝に向かい、北秋川沿いを歩く。

通りの民家軒先には、乾燥させるためか、「大根」、「蒟蒻」、「芋」、「木の実」等、山の幸が寒風に晒され、まさに、「小さな旅」で見る「里山の冬支度風景」と、心を和ませる。

滝への山道は約15分。

入口付近には、休・祭日が営業日のギャラリー、喫茶店が並び、道の途中には、木の香

臭う木工細工店。店頭には本格的な望遠鏡が据えられ、正面、遙か北の馬頭刈尾根山腹に白く輝く、「天狗滝」の流れを案内する。

「払沢の滝」は、山道の終端。

本日も、早、人盛況にて、「日本の滝」にフラッシュを連射。

滝を臨む休憩小屋でコーヒータイムとするが、森氏の欠席により、火器は1セットのみ。

またもや2回に分けての湯沸かしとなり、後半組は、バスの出発時刻と睨めっこしながらの、歩行喫茶。

“次回迄には、別の誰かに購入させるべし”と、改めて心に誓い、標的を絞る。

会頭から、バス停前の名物豆腐店、「ちとせ屋」製の「うの花ドーナツ」のお裾分けを頂戴し、ヘルシー感を覚える微妙な味を初めて賞味する。

【余談27】 奥多摩地区には難解な読みの地名が多い。

「払沢 (ほっさわ)」も然りながら、「笛吹 (うずしき)」、「人里 (へんぼり)」、「神戸 (かのと)」はなかなか読み辛い。

それぞれに由来有るものと思われるが、いずれもバス停名にも使用されており、笑えぬトラブルがあったのは想像に・くない。

本宿バス停に戻り、今度は、三叉路を左手、南谷方向に向かう「数馬行」のバスに乗車し、檜原街道を南秋川沿いに上り、「^{しもひら}下平」で下車。

バス停からは、廃屋他、数軒の家屋が散見されるのみで、今夜の宿、「民宿 かんづくり荘」らしき建物は見当たらず、大谷氏の機転で、宿に携帯連絡し、浅間尾根登山口側に少し戻り、無事入場。

兜造りの旧屋は、街道から1階分下がったレベルを入り口とし、北面窓下に、「南秋川」の流れを見る三層式。

定員70名は、既利用宿ではトップクラスの規模となり、宿泊客は我らを含んで4組20名強と見当する。

【余談28】 宿選びは、①立地、②接客振り、③コストを念頭に行っている。

観光旅館は好立地であることが多いが、②、③に難点があり、近時は、「民宿」を優先し、接客面から、「少定員宿」を選んでいく。

電話の応対振りも気にするが、それにより申し込みを中止したケースはない。

烏森トレッキングでの利用は、陣馬の湯、「姫谷」が観光旅館もどきで、大月、「破魔射

場)、今回の「かんづくり荘」が民宿と称しているが、御岳の宿も実体は後者と言えよう。

到着直ぐに、トラブル発覚！

2室に分かれた・、会頭、米本、山田組の部屋炬燵が、断線模様で用立たず。

しかも、女将から、“実は、その事は昨日より解っていましたが、治す手立てもなく…”と、放置の自白。

“客商売にあるまじき振る舞い”と、義理と人情に厚い大谷氏から叱責を受けた女将、予備線求めて蔵中探し、やっと見つけて、メンテ・サービスにも詳しい同氏に修復して貰う。

「檜風呂」は、樹の香抜けた時代物。それでも豊富な湯量が湯煙となり、大きな硝子戸を曇らし、水を滴らす。

宴の席は、天井高く、四方八方、スペースたっぷりの大広間に設けられ、4組の座席間には間仕切り無し。

かつては、何段にも積み重ねられた養蚕箱が、所狭しと並べられていたのではとの思いを馳せつつ、高天井を見上げるや、懐古も吹き飛ぶ大梁の傾き。

これはいかんと、慌てて、両端支える補強柱に目を遣るや、床を離れて宙に浮き、こうなりやママよと腹括り、“ここにも、冷房不要の「山の宿」、とブラックジョークを絞り出す。

料理は、山菜中心の素朴味。

4組の宴は、負けじとばかりに、ワイワイ、ガヤガヤ、互い勝手な声張り上げ合い、時折、エールも交わし合う、微妙なハーモニー。

我らが宴席に若女将が参上。

炬燵修理に一言御礼申し上げたしと、熱燗3本携えるは、年の割には誠に殊勝な心掛けで、遠慮無く、早速馳走になる。

仕上げの「もり蕎麦」が、また旨い。

お腹を撫で撫で、おもむろに、さあ、お時間と、一言具申、“こんなに旨い「白菜漬け」を、食わず残すは勿体無し”と。

予定通り、酔漢衆議は包んで貰うことで一致し、作戦完遂の交渉役は大谷氏以外に適任無しとも意見が一致、無理を頼んで送り出す。

ウワッハハの、ウワッハッハ！

さすが大谷氏、成果は満点、予定…想通りに、増量成った「大盛り箱」を披露する。

女将の母者が耳打ちしてくれたそうで、“そうか、なるほど、さもあらん”と、みんなで腹打ち大笑い。

4人部屋に集まり、二次会のスタート。

武蔵五日市駅前／コンビニ購入の「角瓶」を据え、ストレートで飲む。

口角泡を飛ばし、声音が上がる頃、宴はたけなわ。

まだまだあるぞと、非常用のポケットウイスキーにも出動願うが、酒の切れ目を睡魔が襲い、軒かき出す御仁が出ては、自然散会止む得なし。

明日の天気はと、硝子戸を引くと、火照った体に心地良い涼感が浸入。

しかし、外は山影の陰影すら判別できない暗黒の世界が広がり、漆黒の闇向こうから南秋川のせせらぎ音が響くのみ。

明日の好天は望み薄と観念し、寢床に就く。

全員、身支度を整えての朝食は、隣のバス停、「数馬温泉センター前」から、朝一番の「都民の森」行き急行バスに乗ろうとの算段から。それでも、旨い旨いとお代わりが弾む。

鈍よりと、曇空に覆われた「都民の森」到着は、9；30AM前。

祭日と云うこともあり、登山者を含めての、早朝からの来場者は多く、森の入り口は賑々しい。

ただ、密かに期待した、いつも深紅に染まる駐車場の樹々は、残念ながら、すでに葉を落とす。

【余談29】上りのバス時刻表に、予定便後の急行便を見つけ、場内整理員に次の降車予定地、「十里木」での停車を訊くと、軽く、“YES”の返事。

それならスケジュールに余裕もと喜んだが、何故か気になり、別の若いバス運転手に再確認するや、重く、“NO”の一言。

“やっぱりなあ”と奇妙な得心をし、引き下がる。(実は事前調査で把握済みであったが、ひょっとしたら臨時停車も、と淡い期待で訊いたもの)

急坂と木階段を上り、なお所々に彩色残す木屑路を、「三頭大滝」へと歩く。

途中、展望が開け、案内看板とベンチを置く休憩所に立ち寄るも、視界無しにて、早々に先へ急ぐ。

「三頭大滝」は、落差33mの岩縫う流れ。

メンバー全員、滝の観光橋、「滝見橋」に並び、眼前の長い滝流を追う。

例年なら、樹々が、橋の周囲を紅葉で埋める筈も、すでに葉落後にて、何とも残念と悔しがる。

滝の上部に回り、流れの源を見た後、「滝見橋」入り口横の木テーブルに座り、ティータム。

タイトな計画に、後の組は、またまた下山しながらのコーヒー賞味。

【余談30】5～6年前になるか、三頭山から三頭大滝へ下ってきた時、女子大生から、「都民の森」に対するアンケート調査を受けたことがある。

完成したばかりの「木屑路」の評価を主とするもので、人工路は似合わない、余り良い回答はしなかったが、年々、それなりの馴染は認められる。

米本氏が、広場の売店で黒土付き大根を購入。新鮮さもさることながら、大きさが半端でなく、「おろし」と言うより、やっばし、「煮物」かな」と、お節介な調理の談議。

短時間の滞在となったが、予定通り、11:00過ぎのバスに乗り込む。

最後のイベントは、十里木ランド河川敷でのバーベキュー。

管理人から、“材料を手配する迄、火を付けずに少々お待ちを”との指示を受けるが、秋川の晩秋、余りに風が冷たく、焚き火を始め、知らぬ間に焚き尽くす。

大谷氏が、薪木1巻(500円)を買い足してきて、苦情のひとつも吐いたのか、またもやここでも端材のサービス持ち帰る。

【余談31】バーベキューの材料手配に40分程要すとのランド側説明に、興味深い推理が2種。

多数派は、蕎麦屋の出前同様、“今、出ました”の類で、短か目、調子の良い回答と理解。もう一方は、後のトラブルを避けるため、長目に鯖を読み安全を見た回答と解釈。

<後者の推理背景>

1. こうした施設は、往々に提供者側がリーダーシップを有し、マイペースで運営している。
2. 駅前スーパー迄は、車で10分内外。(広場に、絵をペイントしたワゴン車が駐車)たかが材料手配に、40分もかかるはずがない。

結果は前者が正解で、1時間近い待ちぼうけ。

<後者の弁解>

1. 食材に飾り加工迄するとは読めなかった。
2. 亭主の一言、“食材迄、注文いただきまして有り難うございました”。エッ、そうなんだ!

鉄板で肉と野菜を焼く、正統派「バーベキュー」に、在庫を一掃するがごとく調達したビール、酒、発泡酒、更には、昨夜入手の「白菜漬け」が加わる大判振る舞い。

焚き火に手を翳しながら、昨日、今日を振り返り、**話題尽きずの“烏合の衆”**。

渓流向こうの樹々には、なお秋彩色を残すが、水の色は、早、鈍色、冬の色。抜ける寒風が、十里木の里に白煙たなびかせ、いつのまにか小雨も混じる。

バス停、「十里木」で武蔵五日市駅へのバスを待つ。

雨に濡れたせいか、道脇丘陵の樹々が、しっとりとした薄朱色の紅葉を見せる。

【余談32】バス停位置の相違に気付いた御仁、有りや否や？

「十里木」は、数馬・藤原方面と養沢方面（日の出山下山後利用した路線）の分岐点となり、路線違いにより合流地点前に同名バス停が2ヶ所所有。降車したのは前者バス停で、乗車したのは後者バス停である。

前述の「本宿役場前」も、北の藤原方面と南の数馬方面に分かれるポイントバス停（但し、同一バス停）で、「払沢の滝入り口」は北路線に設けられているものである。（もっとも、南路線バスでも寄り道する便が多い）

バスの便数が少ない奥多摩地区では、行動範囲を拡げてくれる貴重な知識となる。

（後日、今回の記録を整理していると、宿の領収書、明細伝票の特別料理欄に、「はくさい（夜）500円」の記載有り。…何のことだろう？）